

「西京雜記」の傳承者たち

小 南 一 郎

これまでの六朝の小説史は、多く、怪異を中心とした志怪小説と人事を述べた志人小説（逸事小説）とに大別して記述されてきた。この兩類の作品群は、幾分かは不明な點があるにしても、作者についても製作時代についても、その大體を知ることができる。しかし六朝時代の成立と考えられる、この兩類に屬さない小説的な作品が、無視できない數で存在している。「博物志」、「王子年拾遺記」、「漢武別國洞冥記」、「西京雜記」、「漢武故事」、「漢武帝内傳」などがその例である。これらの作品の現行のテキストに張華、王嘉、郭憲、葛洪、班固などの名が作者として冠されてはいても、それらはいずれも信すべき十分な根據を持っていない。正確な作者、製作の年代が不明であることから、小説史の流れの中には位置づけにくく、その結果として、こうした作品に對する研究は從來あまり進んでいないように見える。

上に挙げた「博物志」以下の作品を纏めて考えてみると、眞の作者や製作年代が共通して不明という以外に、これらの作品どうしを結びつける共通の性格が見付け出せそうである。その内容は、帝王と宮廷のことを述べるものが多く、時代は現在から切り離された過去、特に漢代に取ることが多い（魯迅『中國小説史略』が「今所見漢人小説」の章で取り擧げている作品は、みなここでその性格を考えようとする作品群に屬

す）。地域は都に集中し、同時に遙かな異域が關心にのぼっている。また作品全體が方術的な雰圍氣に彩られることが多く、志怪・志人小説には鋭い事例の列擧という方向が顯著であるのに對して、より柔かい物語的な性格が強いように見える。このような、これまでの小説史研究の視界に完全には入ってこなかった作品群は、そうしたネガティブな意味での共通性だけでなく、その成立の基盤においても共通なものがあったのではなからうか。

ここでは、こうした一群の作品の中では比較的研究の進んでいる「西京雜記」をまず取り擧げた。

字句の小さな異同はあるにしても、孔天胤刊六卷本（四部叢刊本）と盧文招校二卷本（抱經堂叢書本）とを代表とする現行の諸テキストは、「西京雜記」の古い形態をよく傳えていると考えられる。類書などを詳しく調べられた西野貞治「西京雜記の傳本について」の論文や、金嘉錫「西京雜記對正」の詳細な對校の仕事からも、現行のテキストが十分に信頼できることが知られる。以下この論文中での「西京雜記」の本文の引用に當っては、四部叢刊本に據りつつ、盧文招の校本と金氏の「對正」を参照した。付記した卷數は六卷本による。書き下し文は、伊藤東涯序の和刻本を参照して作ったものである。

「西京雜記」の著者としては、これまでに葛洪、吳均、蕭賁などが推定されてきた。作者に關する多くの人々の意見を一つ一つ検討するわけにはゆかないが、その中から代表的なものを次に挙げる。

兩「唐書」の經籍・藝文志をはじめとする諸目錄が西京雜記を葛洪の撰とするのに據りつつ、斷定はせぬまでも葛洪を作者に比定しようとする有力な議論として、余嘉錫「四庫提要辯證」がある。

梁の吳均を作者とするのは、「西陽雜俎」語貧篇に引用される庾信の言葉に據るのであるが、『四庫全書簡明目録』が吳均と斷定するのはこれを信じたものであろう。

「南史」齊武諸子傳に、蕭賁が西京雜記六十卷（十を衍字とする）を著した、という記事があるのに據って、蕭賁が作者かも知れぬと考えるものには、勞榘氏の論文「論西京雜記之作者及成書時代」がある。

このようになざまざまな議論を纏めた形で洪業「再說西京雜記」の論文があり、上記の余嘉錫氏の議論とともに、「西京雜記」に對する文獻學的な追求の頂點を示している。しかし、目錄や古人の斷片的な記録などの外的な材料をいくら巧みに整合させ、相互の間を矛盾なく説明できるようにしたとしても、極言すればそれは一種の知的な遊びにすぎない。そこから産み出されるものは、たとえそれがいかに整理されていて美しかろうとも、結局は作品内部の渾沌に直接立ち向うてゆこうとする方法に及ばないであらう。

「西京雜記」の内部に入りこむ手段として、ここでは説話とその傳承者の探求という視點を据えてみたい。「西京雜記」は、前漢時代の都・長安における瑣事を雜然と纏め記録したものであるという體裁を取っているが、そこに集められているものは、内容的にも、その記述の表面に表れた傳承の過程の點でも、きわめて説話的である。

例えば、「西京雜記」の記述には羅列的な部分が多い。卷一には、上林苑を作ったとき、臣下たちや遠方の土地から献上された名果や異樹に美名を付けたとして、百餘種の樹果の名前を挙げる。また同じ卷に、趙飛燕が皇后に冊立されたとき、昭儀であったその妹が手紙と共に贈った衣服調度として、三十五種の品目を列挙している。

また術學的な部分がいくつかある。卷三には、將軍の樊噲が陸買に、いにしえより君主が天命を受けると瑞應があると言われるが、本當にそんな事があるのか、と尋ねたのに對する陸買の答えを載せている。陸買は言う、

「確かにございます。目がせわしなく動くのは酒食をふるまわれる前兆であり、燈火がパチパチはぜるのはお金が儲かる前兆、乾鵲せきせきが噪ぐのは旅人がやって來る前兆、蜘蛛が集まるのは全てがうまくいって喜びのある前兆でございます。小事にこうした前兆がありません以上、大事にもまた同様なのでございます。」

等々と、民間の信仰を利用した陸買のあまり論理があるとも見えない議論を長々と載せている。それに續く條では、霍光の家に双子が生まれ、先に出てきた子を兄とすべきか、或はまた上に居た者を兄とすべき點から、後から出てきた子を兄とすべきか、二つの意見が分かれたときに、霍光が「殷王祖甲一産二子」の例から近代に到るまでの種々の故事を引いてそれを判定したことを記している。また卷五の、元光元年七月に京師に雹が降ったとき、鮑敞が董仲舒に雹の成因について尋ね、それに對する董仲舒の答えとして載せられた篇中最長と思われる一段、李廣の矢が石に立ったことについての議論なども同様の性格を持っている。

卷六の最後の條には、秋胡の話しを載せる。新婚早々宮仕えに出た

秋胡という男が、三年のち故郷への歸途、道ばたで桑を採る女性を見て、金を與えて挑もうとしたが、實はその女性は彼の妻であつて、絶望した彼女は自殺をするという、後漢時代の畫像石に描かれ、六朝の歌謠にしばしば歌われる説話である。「西京雜記」は、この話しを載せるために、もう一人別に同名の人物がいて、こうした秋胡の傳説があるため結婚ができなくなりそうになつたとき、馳象がそれを執り成して「むかし魯人の秋胡は……」と語り、別人であることを明らかにしたという込み入った形式を取る。その後二人の曾參、二人の毛遂の例を挙げ、

「玉の未だ理めざる者を璞と爲し、死鼠の未だ腊せざる者も亦た璞と爲す。月の且を朔と爲し、車の軸も亦た之を朔と謂う。名は齊しく實は異なる。宜しく辨ずべき所なり。」

と、いささか得意げな口調で、結論をつけている。

こうした術學的な部分は、その議論自體としてはあまり内容のないものである。董仲舒の電についての陰陽の氣による説明が四字句で文章を整えようとしていることから言つても、このような議論はその内容よりも表現に重點があつたのだと考えるべきであらう。

上に述べた羅列的な特色とこの術學的な特色とは、「博物志」の内容の特色とも重なるものであるが、こうした記録が知識人のための百科辭典的な記載であつたと言うより、かえつて講釋師(物語りを専門的に語る人物)が扱う説話となんらかの關係があつたことを示唆している。こうした性格は、彼らの口演に當つての説話の内容と聽衆に對する姿勢のティピカルな表出である、その語り口に由來するものと考えられる。我が國の軍記物などの講唱文藝的な物語りの處々にあらわれる有職故實・中國の典故のひけらかしや、「平家物語」の、例えば源

氏揃の巻に見られるような羅列と同じような性質が感じ取られるのである。

また卷二には、匡衡が貧乏の中で學問に勵んだときのこととして、燭がないので隣家との間の壁に穴をあけ光を盗んで書物を讀んだという逸話と並んで、邑人の大姓の文不識のもとで仕事に勵み、その代償として書物を譲りうけたという話しを載せている。文不識(あきめくら)という名前の付け方の無造作さは、愚公や智叟の出でくる寓話や昔話しを連想させる。こうした條は、民話的な説話と關係を持つものである。

『四庫提要』子部・小説家類の西京雜記の條は、「西京雜記」の内容に「史記」や「漢書」と合致しない點が多いことを一々指摘している。それに對して、必ずしも間違つてはいないのだとする辯護論もある。例えば、卷三の、

文帝爲太子立思賢苑以招賓客(下略)

の條について、『四庫提要』は、「文帝 太子爲りしとき」云云と讀み、文帝は代王から即位したのであるから、太子になつたことはなく、「雜記」の記事は誤りだとする。それに對して前に挙げた洪業氏の論文は、この一文は「文帝 太子の爲に思賢苑を立つ」と讀むべきであつて、そうすれば正史と矛盾するなどと言ひ立てる必要はないと論じている。

しかしこの問題も、説話的な視點から解決すべきでなからうか。この書物と同様に、表面的には春秋時代末の吳と越の争いの歴史記録という形式をとりながら、處々で正式の歴史書と矛盾する記事の内容とされている書物に「吳越春秋」がある。陳中凡氏は「論吳越春秋爲漢晉間的説部及其藝術上の成就」と題した論文の中で、「春秋左氏傳」「國

語「史記」などの歴史書と「吳越春秋」の内容とを比較され、多くの矛盾する点があることから、この書物を「説部」なのだとしている。陳中凡氏が「説部」の語によって具體的にどうしたものを考えているのか十分には明確ではないが、「吳越春秋」の内容が説話傳承者の間で發達し、その傳承の過程で正式な歴史書とは矛盾する部分を付加してきたのだと、陳氏の結論を演繹することが許されるであろう。

「西京雜記」の場合も、同様に考えることができよう。そして更に「西京雜記」の場合には、陳中凡氏が具體的な性格については述べられなかった説話傳承者の姿を、その文章の間から見てとることができると。

説話の傳承者を追うという視點で「西京雜記」の本文を讀んでみると、まず劉歆が浮かび上がる。この書物の處々に傳承者の位置を示す「余」「家君」といった言葉がちりばめられていて、「西京雜記」全體が劉歆に記録者としての視點を置いて纏められていることを知ることができるのである。

まず「余」の例を挙げれば、卷三に、

郭威、字は文偉、茂陵の人である。讀書を好んだ。彼の意見では、「爾雅」は周公の作とされるが、「爾雅」の本文に「張仲孝友」の句があり、張仲は「周」宣王の時の人であるから、この書物が周公の作でないことは明白である、とのことであった。私（余）は、あるときこの事について揚子雲（揚雄）の意見を求めた。揚子雲は言った（下略）。

とあり、上述の術學的な特色を持った條の例にもなる。また卷六には、次のような條がある。

昆明池には、戈船と樓船、各々數百艘があった。樓船は、船上に

物見やぐらを建て、戈船は、船上に戈や矛を立て、四角には幡旄を垂らし、旌葆塵蓋などの旗や衣笠が水涯に照り映えていた。私（余）は、若い頃、これを見たときのことを、まだ思い出すことができる。

「家君」の例として、卷二から挙げる。

成帝は蹴鞠を好まれた。臣下たちは、蹴鞠は身體を疲れさせますゆえ、至尊がなさるにはふさわしくございません、と意見をした。帝は言われた、朕はこれが好きなのだ。なにか似ていて身體が疲れぬ遊びを捜して申すように、と。父上（家君）が彈碁を作つて献上したところ、帝は大いに喜ばれて、青い羔裘（小羊の皮ごろも）と紫の絲履（絹の靴）を賜わり、それらを着用して朝覲することを許された。

このほかに、家人（自分の一族の者）の語が、卷二の茂陵の家人が寶劍を献上した條と、同じ卷の惠帝七年に雷が南山に落ちたとき、家人がそのあたりで龍骨を拾ったという條に見える。

こうした點から確認されるのは、これらの記録が、正式の歴史書のように個人を離れた鳥瞰的な視點から記述されるのではなく、ある個人の目を通したという形式で書きとめられていることである。その個人（すなわち余）が劉歆であると、本文からだけでは斷定できない。しかし父親が成帝の朝に仕え、自身は揚雄と親しい關係にあった（揚子雲と字で呼ぶのもそれを強調しようとしてのことであろう）人物であり、劉向「新序」などの意見が内容に利用されていることと考え合わせて、後述の跋文と切り離して考えても、劉歆がその内容の記録者としての役目を負わせられていたことはほぼ間違いないであろう。

「世説新語」巧藝篇の劉孝標注に引く傳文「彈碁賦」の叙は、劉向

が蹴鞠の代りに彈碁を作ったと述べている。上に引用した家君の條と對比するとき、晉の傅玄の時代、少なくとも梁の劉孝標の時代までには、家君が劉向で余が劉歆であるという「西京雜記」の結構の骨となる枠組みができていたことを知る事ができる。

これに關連するのであるが、「漢武故事」には、東方朔の房中術による長生を述べて次のような記事がある。

(前略)ただ長陵の徐氏で饒君と呼ばれる一人の婦人だけが、よく東方朔の術を傳え、今上陛下の元延年間に到って、已に百三十七歳になつていたが、見た所は童女のようにであつた。(中略)都の内の淫亂を好む者は、争つて彼女のをもとを訪れた。翟丞相は上奏をして、風俗を損ずるゆゑ淫亂の最もひどい者を死刑に處せられるように、と願ひ出た。今上陛下はそれを許されず、この婦人を燉煌に流した。彼女は、後に異民族の間にまぎれてしまつて、終りは分からぬ。(古今逸史本)。

元延年間とあることから、ここに見える「今上」は前漢時代末の成帝を指している。成帝を今上と呼ぶ時代想定から言つて、「漢武故事」も、もともとその記録者として劉向あるいは劉歆を置いていたと考えることができようであらう。更に大膽に飛躍をすれば、「西京雜記」と「漢武故事」が同じような時代と事柄を扱ひながらほとんど重なることがないのは、兩書が原來は一つのものであつたことに由來するのだとも考えられる。一つの書物が分裂してこの兩書になつたとまでは言えぬにしても、兩書が補ひあう關係にありながら並存したとすることは可能であらう。

劉歆を軸とした「西京雜記」と「漢武故事」の結びつきについては結論を急いではならないが、少なくともこの兩書は、その結構の枠組

み的な部分の性格から言つても、密切な關係を持ちつつ成立したものである。「漢武故事」の通行本に著者として班固の名が冠せられてゐるのは、原來の前漢末のある人物の目を通して記述されるという假託の意味すら分からなくなつた後人のしわざなのである。

「西京雜記」には、余・家君・家人といった記録者の位置を示す言葉が表れるほか、匠人の丁緩、幻術者の鞠道龍、宮女の賈佩蘭などが語つたことを直接あるいは間接に余(劉歆)が記録したという部分がある。

匠人の例は、卷一に次のようにある。

匠人の丁緩、李菊、巧は天下第一たり。結構既に成り、其の姉子の樊延年に向いて之を説く。而して外人 知ること稀に、能く傳うる者なし。

丁緩、李菊たちが、自分たちが完成した宮殿や調度のすばらしさについて、姉の子の樊延年にこまごまと語つた。樊延年が聞いた内容が、この「西京雜記」に記録された。「外人は知ること稀に、能く傳うる者はない」のであるが、こゝした傳承過程を過て、この書物にだけは傳わつてゐるのだと強調する所に特色がある。

同じ卷一の上林苑の貴樹についての記録も同様である。

余 上林令の虞淵に就きて、朝臣の上りし所の草木名二千餘種を得たり。隣人の石瓊 余に就きて借らんことを求め、一に皆な遺棄す。いま記憶する所を以つて、篇右に列ぶ。

自分が上林苑の管理者から聞いた草木の名前の記録は、人に貸したために失なわれてしまつたが、ただ自分の記憶にあるものだけをここに記したという、屈折した傳承とこの書物だけに傳わるのだという思わせぶりの表示は、大きく「西京雜記」の成立基盤にかかわつてゐるよ

うに見える。こうした思わせぶりは、「西京雜記」の編者の讀者に對する基本的な姿勢なのであり、それは恐らくこの書物を作り上げてゐる各々のエピソードを傳承してきた講釋師たちの聽衆に對する基本的な口調の反映であつたのであらう。語り手は、自分は漢の宮中の人と特別の關係があり、このことは自分だけが知っているのだと強調し、聽く者の方も、自分だけがそれが聞けるといふなにか共犯的な心理となつて有難がる——そのような物語りの場が想定できる。

卷三では、幻術者の鞠道龍が、黄公という術者が術力おとろえて虎に食ひ殺されたことを語っている。

余の知る所に鞠道龍あり。善く幻術を爲す。余に向いて古時の事を説く。東海の人、黄公あり。少き時、術を爲し、能く龍を制し虎を御し、赤金の刀を佩び、絳繒を以つて髪を束ね、立に雲霧を興こし、坐に山河を成す。衰老に及び、氣力羸憊、酒を飲むこと度に過ぎ、復た其の術を行うこと能わず。秦の末、白虎あり、東海に見る。黄公乃ち赤金の刀を以つて往きて之を厭す。遂に虎の殺す所と爲る。三輔の人、俗に用て以つて戲と爲す。漢帝も亦た取りて以つて角抵の戲を爲す。

又た説く、淮南王、方士を好む。方士は皆な術を以つて見ゆ。遂に地を畫して江河を成し、土を撮して山嶽を爲し、嘘吸、寒暑を爲し、噴嗽、雨霧を爲すことあり。王も亦た卒に諸の方士と俱に去る。ここにおいても、黄公や淮南王のことを鞠道龍が語つたのを自分が記録したのだという、中間にクッションのある傳承の形式をとつてゐる。黄公の條の最後に、この事が劇に仕組まれ宮中でも上演されたと言書かれている。「赤金の刀を佩び、絳き繒もて髪を束ぬ」という記述は、恐らく演劇の装束に關連しよう。しかし説話があつてそれが演劇

に取り入れられたのではなく、逆に演劇に結びついてこの話しが存在したのだと考へるべきであらう。

この劇が實際に宮中で上演されていたことは、張衡「西京賦」の宮中の百戲を描寫した部分からも知ることが出来る。この賦の終り近く、平樂觀で行なわれる百戲を述べた一段を次に擧げ、薛綜(三國吳の人)の注によつて補いつつ解釋をつけてみる。

大駕は平樂觀に幸し、甲乙「の帳」を張り、翠被を襲ぬ。珍寶の玩好なるを擲め、瑰麗の參靡なるを紛う。迥望の廣場に臨み、角觥の妙戲を程す。

天子は平樂觀に入ると、觀の前の廣場で百戲を始めるように命じた。觀は、恐らくこうした藝能を見るための建物で、南面して前に廣場(舞臺)があり、東を上手としたらしい。

烏獲は鼎を打げ、都盧は槿を尋る。狹きを衝り燕のごとく溜びし、胸に銛き鋒を突きたつ。丸劍の揮霍たるを跳らせ、索上を走りて相い逢う。

力士が鼎を持ち上げ、身輕な藝人が旗竿を登り降りする。劍の輪の中をくぐり、水盤の前にして鳥の水あびのような輕わざをし、胸に刀を突き立てる(?)。丸や劍をお手玉にし、二人が組になつて綱渡りをする。

華嶽は袞袞として罔罽は參差。神木靈草、朱實は離離たり。總て僊僊を會め、豹を戲らせ艷を舞わす。白虎は瑟を鼓し、蒼龍は箎を吹く。女娥、坐して長歌すれば、聲は清暢として倭蛇たり。洪涯立ちて指摩し、毛羽の襍穢なるを被る。度曲未だ終らざるに、雲起こり雪飛ぶ。初め飄飄たる若く、後は遂に霏霏たり。

やがて舞臺には華山が出現する。山には靈草が茂り仙果がたわわに實

り、虎や龍の縫いぐるみをつけた樂人たちが音楽を奏しており、神女が歌い、羽人がそれを指揮する。音楽が終らぬうちに、雪が降ってきて舞臺の上の一切をかき消してしまふ。

復陸重閣、石を轉じて雷と成す。霹靂激して響を増し、磅礴 天威を象どる。巨獸百尋、是れを曼延となす。神山の崔巍たる、欬として背より見る。熊虎 升りて挈攫し、猿狖 超えて高援す。怪獸陸梁し、大雀陵峻たり。白象は行ゆく孕み、垂れし鼻は驕困たり。海鱗變じて龍と成る。狀 蜿蜿として以つて蠃蠃。舍利 殿殿として、化して仙車となり、四鹿に驅ね駕し、芝蓋に九葩あり。蟾蜍と龜と、水人は蛇を弄ぶ。

復道の上に石を轉がして雷鳴に擬すると舞臺は一變する。百尋もある巨獸が現われて曼延の戲をなすのである。巨獸は舞臺の中央まで進むと、背中からばつと神山を現わす。神山には熊や虎、猿たちが登っている。怪獸がうろうろ歩き、大きな雀や白い象も出てくる。大魚が龍に變わり、舍利の獸も、四匹の鹿に引かせた仙車に化ける。蟾と龜が踊り、水人は蛇を弄ぶ。

奇幻 儼忽として、貌を易え形を分かつ。刀を呑み火を吐き、雲霧 杳冥たり。地を畫して川を成し、涓を流し涇を通ず。東海の黄公、赤刀もて粵祝す。白虎を厭せんと冀いて、卒に救う能わず。邪を挟み壘を作すも、是に於いて售われず。

續いて幻術師たちが出てくる。目まぐるしく顔貌を變え分身の術を使う。刀を呑み、口から火や雲霧を吹き出し、地面に線を引くと大河になる。東海の黄公が現れ、赤い刀を持ち南方の蠻人風の呪文を唱えて虎退治をしようとするが、逆に虎に食われてしまふ。

まだ百戲は續けられているが、黄公が虎に食われた所で引用を止め

たい。この最後の幻術の部分は「西京雜記」の中で鞠道龍が語る物語りと内容的によく符合している。黄公のことは言うまでもないが、淮南王劉安の昇仙の話においても、方士たちが「地を畫して江河を成し、土を撮して山嶽を成し」、また「噴嗽 雨霧を爲す」のは、「西京賦」の「地を畫して川を成し」、「雲霧 杳冥たる」のに對應しよう。同じく劉安の昇仙を説く葛洪「神仙傳」卷四には、老人の姿で現れた淮南八公が門番の目の前で童子に變つた、とあるが、これも「西京賦」に「貌を易え形を分かつ」とある幻術になんらかの關係があるう。すなわち淮南王昇仙や黄公虎退治の説話は、宮中の百戲(特にその幻術的部分)と強い結びつきがあったことを推定することができる。

黄公についても少し考えてみると、「西京賦」の薛綜の注は次のように言う。

東海に能く赤刀もて禹歩し、越人の祝法を以つて虎を厭する者あり。黄公と號す。

刀を持って禹歩(特別のステップを踏む)することに關連して「冥祥記」(法苑珠林卷六二引用)の記事が注意される。

鄰家に道士祭酒あり。姓は魏、名は叵、(中略)道士が佛道に對抗しようとして試み、全て失敗する。巨らの師徒、猶お盛意やまず。被髮して禹歩し、刀と索を執持し、佛を斥けて胡國に還えし、中夏に留まりて民に害を爲すを得ざらしめんと云う。

刀と綱を手に持ち、ざんばら髪で禹歩を行なうのは、邪惡なものを人間世界から追放するための呪法であつたのであろう。その邪惡なものとして黄公の場合は虎があるが、魏巨師徒は佛もその一種と見なしたのである。「冥祥記」の記事からも知られるように、六朝期においてもこうした呪法が實修されていた。

恐らく同様の實修を持っていた漢代の方士たちが官廷に近づくと共に、その儀禮は元來もっていた宗教的な意味を失ない、「老いさらばえた術者が頼り無い腰つきで虎に近づき、結局は虎に食われてしまふ」という内容の滑稽劇に變身したものであらう。中國の演劇の起源は、古く溯れば先秦時代の官廷の俳優たちの所作事にゆきつく。しかし幾分かはその内容を知りえて後世に繋がってゆくのは、王國維『宋元戲曲史』が唐の開元以後に盛んになるとする踏搖娘や參軍戲などの滑稽劇である。演劇の起源が滑稽劇にあると斷定はできぬであらうが、演劇史の初期に顯著である滑稽劇の具體的存在は、少なくとも後漢の張衡の時代までは溯らせることができよう。また六朝期の道士がまだ宗教的な意味を喪失せずに實修していた儀禮が、官中では早く演劇化していた原因は、官廷という特殊な世界に入ると共に本來の成立基盤から切り離されてしまったことに求めることができる。民衆の生活から離れた呪術師たちは、彼らの實修を積極的に藝能化することによって、代つて支配者層の保護を求めたのである。「西京賦」にも見られる、官中の百戲の持つ強い神仙的雰圍氣は、このような藝能人化した方士との關係を考へることによって、よく理解される。

「漢書」藝文志の小説家の條には、一見雑多な書物が載録されているようであるが、その大部分は官中の口頭藝能に關係があつたであろうことを指摘できる書物である。「小説」の語は、魯迅『中國小説史略』も指摘するように、先秦諸子の文章の中に既に見える。しかし後世に繋がっていく意味での小説の説の語は、「西京雜記」の記述においても、

鞠道龍が古時の事を説いた。

賈佩蘭が宮中で見た事を説いた。

等々とあるように、なんらかの意味で「語り物」を意味していたと思われる。「三國志」卷廿一の裴注に引く「魏略」には、

曹植は、白粉をつけると、冠をはずし膚脱ぎになつて、邯鄲淳の前で、胡舞や五椎銀の戲、弄丸や擊劔を行ない、俳優の小説數千言を誦した。

とあつて、小説が百戲的な藝能の一部をなすと共に、それが「誦する」ものであつたことが分かる。再び「西京賦」に據れば、上林苑に向かう主君の屬車には小説家も侍している。

乃ち祕書あり。小説九百、もと虞初よりす。從容の求ねに、寔に俟ち寔に儲う。

この虞初の「周説」九百四十三篇（漢書藝文志）は、周代のことを語る歴史物語りであつたにちがいないが、これも「周の説」と名付けられている。そして藝文志の班固の自注に、この虞初が武帝のときに方士の技能を以つて侍郎になつたと記されていることは、上述の方士と藝能者（小説家を含む）との密切な關係を裏付けるものである。

この論文でその性格を考へようとしている「博物志」「王子年拾遺記」等々の作品の中に漢の武帝が主人公となる説話が多く、特に「漢武故事」は武帝の物語りだけで成り立っているのも、「漢書」武帝紀に、

〔元封〕三年春、角抵の戲を作る。三百里の内、みな來たりて觀る。

同じく西域傳贊に、

孝武の世……四夷の客を饗し、巴俞都盧・海中碣極・漫衍（曼延）魚龍・角抵の戲を作りて以つて之に觀視しむ。

とあり、虞初も武帝のとき侍郎となつていようように、こうした藝能者

たちを積極的に宮中に取り入れたのが武帝であったことに一つの原因がある。『史記』封禪書に見えるように、武帝の事跡自體が神仙的な説話に結び付きやすかったこともあろうが、上述した通り封禪書に活躍する方士たちと百戲の藝人たちがほとんど一つのものであったとすれば、武帝の方士登用に付隨して宮中に入った藝人者たちが、子孫代々、藝能の制度を整えた主君として武帝に特別の親しみを懷き、多くの説話を武帝に集中させたであらうことも想像にかたくない。「漢武故事」に

未央庭中に角抵戲を設け、外國を享す。三百里の内、みな觀る。角抵なる者は六國の造めし所なり。秦 天下を并せ、兼ねて之を増廣す。漢興こりて罷むと雖えど、然れども猶お都なは絶えず。上(武帝)に至りて復た採りて之を用う。四夷の樂を并せ、嫖(ま)るるに奇幻を以ってし、鬼神の若きあり。角抵なる者は、角力をして相い抵觸せしむる者なり。其の雲雨雷電、眞に異なるなし。地を畫して川と爲し、石を聚めて山を成す。倏忽として變化し、爲さざるなし。

(魯迅『古小説鈎沈』三〇三頁)

とある記事は、藝人者自身の百戲の起源についての傳承に據った記述なのであろう。

小説家と方士を結び付けて考える議論として、既に王瑤「小説與方術」の論文がある。王瑤氏は、巫から發達した方士たちが、支配者層の歡心を買うために、自らの術を「神」にしようとして小説的な著述を行なったのだとされる。そして特に漢の武帝を取り擧げることが多いことについては、「ちやうど儒家が堯舜を稱道するように、方士(のちの小説家)も、一人の帝王を擧げて、方士を信任したのために太平興國を致すことができたという標準的な實例にする必要があった。

「西京雜記」の傳承者たち

(中略) 秦の始皇帝は國祚が短かく、當然おめでたい例ではない。こうした點から標準に最もよく適合する人物として、漢の武帝に勝るものはなかったとされる。私もこの説明を否定はしない。ただ方士と小説家の中間に宮廷藝人者を入れることが、小説の形式と内容を考えるとき、どうしても必要であると思う。

更に付け加えれば、王瑤氏は方士から小説家への線上に志怪・志人小説の發生や展開をもつて説明される。例えば干寶「搜神記」序の「神道の誕(た)りならざるを發明する」という宣言も、方士たちが自らの術を「神」にしたのと同性質のものだとされる。もちろん志怪・志人小説がこうした方士たちに起源する物語りと無關係だとは言えない。しかし志怪・志人小説の編者たちの記述する内容に對する態度には、私がここで範圍を限定して取り扱っている作品群の場合と、いささか隔りがあるように見える。ここで取り扱っている作品群に對しては、王瑤氏の論はよく當て嵌まるであらうが、志怪・志人小説に對してはもう一段の考察が必要であらう。

本題にかえて、一つの假説であるが、「西京雜記」の内容を成している各々のエピソード、更により廣くはこの論文で扱おうとする諸作品の内容は、こうした宮中の藝人者に起源をもつ傳承者たちによつて傳承されてきたものと考へたい。例えば上に引いた劉向の蹴鞠・彈某的條からも窺える、「西京雜記」の持つ遊びの雰囲気は、そのような遊びを取り扱った藝人たちの間の傳承に由來するものであろう。説話の傳承者がそうした藝人の廣い範圍に關係し、そこから話柄を攝取しえた場所としては、宮中の雑多な藝人者の接觸の場が最も考えやすいものである。

「西京雜記」は賦という形式の文學に大きな關心を持っている。卷

四には、梁の孝王が忘憂の館に遊んで遊士たちにそれぞれ賦の製作を命じたという梓組みのもとに、枚乗の柳賦など八篇の賦を載せる。また司馬相如や揚雄に關係させて、賦を作るための心得や賦の製作に關する逸話が處々に收められている。このことも、賦の製作と傳承が宮中の「優倡」たちと密切につながっていたことから説明されよう。宋玉や司馬相如について、彼らが主君の無聊を慰めるための藝人に近かったことを示す多くの逸話が残っている。「漢書」枚皋傳に、

枚皋 經術に通ぜず。詼笑は俳倡に類す。(中略) 言う、賦を爲りて乃ち俳、視らること倡の如しと。自ら倡に類するを悔ゆるなり。(中略) 凡そ讀むべきもの、百二十篇。其の媿戯にして讀むべからざるもの、尙お數十篇あり。

とあることも、賦という文學形態が、俳倡たちの俳諧の口頭藝能と紙一重であったことをよく示している。宋玉や司馬相如の作として後世に傳わっている作品の中に多くの僞物が入っており、また例えば司馬相如の「長門賦」について、特にその序の記述が史實と合わぬことが指摘されている。それも、賦という文學が基盤として持つ非個人的な宮中の藝能という性格に由來するものであり、「西京雜記」が賦と關係を持つのもこうした性格を通じてなのである。

このような宮中の藝能者たちの傳承が、いつの時代にか民間に出ていた。後漢末以後の政治の混亂の中で、藝能者たちが官の庇護を受けられなくなつて民間に出たものかも知れない。「西京雜記」の内容を成している、宮中のできごとや行事や調度の描寫を懂れをもって熱心に聞くのは、宮廷から隔絶された民間の人々であつたにちがいない。そうしたときの語り口をよく傳えているのが、卷三の賈佩蘭の條である。

戚夫人の侍兒賈佩蘭、後に出でて扶風の人段儒が妻と爲る。説く、宮中に在りし時、見る、戚夫人 高帝に侍す。嘗に趙王如意を以つて言と爲す。而して高祖 之を思ふこと幾ど半日 言わず。歎息悽愴として、未だ其の術を知らず。輒ち夫人をして筑を撃た使む。高祖 大風の詩を歌いて以つて之に和す。

又た説く、宮内に在りし時、嘗に絃管歌舞を以つて相い歡娛し、競いて妖服を爲し以つて良時に趣く。十月十五日、共に靈女廟に入り、豚黍を以つて神を樂り、笛を吹き筑を撃つて、上靈の曲を歌う。(中略) 此の如くなること終歲なり。戚夫人死して、侍兒皆な復た民の妻と爲る。

日本の民俗學の研究では、小野小町の事跡や和泉式部の墓が各地に散在することから、自分こそは小町であり和泉式部だと稱し、自分は昔これこれの事をしたのだと語つて各地を巡つていた傳承者たちがいたらしいこと、少なくとも聽衆は話しの主人公が身の上を語っているのだと信じて疑わなかつたことが明らかにされている。また別の形式ではアリオウと名のる傳承者たちが、自分の主人であつたと稱する俊寛僧都の物語りを語つて歩いたことも知られている。

前漢時代の宮中のでき事も、同様の性格を持った人々によつて傳承され、小説化されていたと考えることができる。上の例では、戚夫人の侍女であつたと稱する傳承者が、自分が宮中で見聞したことだとして宮中のことを語り聞かせていたのである。「西京雜記」の中にも幾く條か收められた、戚夫人の呂太后との確執とその惨死、趙王如意の廢立、暗殺などの物語りが彼女たちの語りのレパートリーであつたのであろう。そして武帝の時代のことを見てきたのだと稱して語る者、前漢末の事件を同様にして語る傳承者たちもいたはずである。そうし

た傳承者の姿を、もう少し外的にとらえた記録が「博物志」にある。

後漢の末年、關中が大いに亂れたとき、前漢時代の墓を發いた者がいた。墓中の人はまだ生きていて、外につれ出されると、もとのように健康な身體になった。魏の郭皇后は、彼女（女性の傳承者であるう）を愛し氣を使ってやって、宮中に入れると、いつも側近く侍らせた。彼女に漢代の宮中の事を尋ねると、手に取るように語り、皆なつじつまが合っていた。郭皇后が崩ざると、ひどく泣いて、彼女も死んでしまった。（黄丕烈校本卷二、通行本卷七）

恐らくこの時代の聽衆には、昔のことを全然なにの保證もなく語られたとしても信ずることができず、かと言ってそうした物語りを虚構として楽しむ心構えもなかったのである。だから賈佩蘭は、自分が宮中に見てきたことなのだという形式をとって人々を信じさせなければならなかった。人々の心のあり方が、まだ十分には虚構の物語りを虚構として楽しむという段階にまで發達していなかったことが、宮中の物語りという虚構を、更に自分がそれを直接見聞してきたのだという虚構の枠組みの中で語るといふ、二重の虚構を必要とさせたのである。

このような虚構の枠組みを用いる語り方の起源も宮中の方士的小説家たちに求められるであろう。「史記」封禪書に、

上（武帝）に故き銅器を有り。李少君に問う。少君曰く、此の器齊の桓公十年、柏寝に陳ぶ。已にして其の刻を案するに、果して齊の桓公の器なり。一宮盡く駭き、少君は神にして、數百歳の人と以爲へり。

とあるように、古い時代の事件に立ちあつたとするのが、方士たちが自らを神にする常套手段であつたに違いない。次に引用する「漢武別

國洞冥記」の一條も、方士が自分はその場に立ち合つたと稱して周代のことを語るのであるが、虞初の「周説」も同様の語り口によつていた（少なくとも語り口の一つの形式として用いていた）と考えられる。

孟岐は清河の逸人である。年齢は七百歳ばかり、話すことは周王朝の初めにまで及んで、詳細で目の前に見るようであった。孟岐は、周公に侍して壇に昇ると、手で成王の足を撫でた。周公は玉笏を孟岐に賜わり、彼はいつも大切に手に持ち、たびたび衣服の袂で拭いているうちに、笏は七分の厚さがあつたが、いまではすり切れて折れてしまつた（？）。桂の葉を取つて食べて「長命を保ち」、武帝が神仙を好むと聞いて、草の蓋を被つてやって來て帝に目通りをしたのである。（漢魏叢書本卷二）

しかし聽衆が方術による長命でも信じないかぎり、魏晉以後の傳承者にとつて、前漢時代のことを見てきたのだとして語るには時代の隔りが大きすぎた。それを處理するために、日本には「八百比丘尼が人魚の肉を食べて八百年も生きのび、遠い昔のことを語る」という形式の語り方があつたが、中國では、上引の「博物志」の例のように、より合理的（？）に「語り手は一度は死んだが、今の世に生きかへつたのだ」という形式をとつてこの時間の隔りを飛び越えたのである。六朝時代に蘇生譚が多いのは、一つには時代的な雰圍氣によるのであろうが、またこうした傳承者たちが活躍したことにもその原因が求められよう。一旦死んだあともう一度よみがえつて地獄のことを語つたという形式の六朝に盛行した地獄巡りの語りものも、その場合は時間ではなく此岸と彼岸とを飛び越えたのであるが、虚構がそのままでは聽衆の耳に入らないという時代的な制約を示している。

「博物志」の上例に續く條には次のようにある。

漢末、范友朋の家を發く。奴は猶お活く。友朋は霍光の女婢。光の家の事、廢立の際を説き、多く漢書と相い應ず。此の奴 常に民間を遊走し、止住の處なし。いま在る所を知らず。或は尙お在りと云う。余 之を人に聞く。信ず可くも目に見る可からざるなり。

この場合は、霍光の女婢の范友朋（漢書霍光傳、匈奴傳に見える范朋友のことであろう）の家の召し使いが、生きかえって、霍光の家のことや宮中のことを語ったという形式を取っている。自らを召し使（奴）であったと語らねば人々に信じてもらえなかつた語り手は、あまり立派な生活をしていたとは思われない。また「常に民間を遊走し、止住の處なし」とされているのは、宋以後の記録に見えるような都市に定着した講釋師ではなく、ジプシーのような流浪の生活を送る傳承者の姿を捕えたものと考えられよう。そしてその語りの内容が「漢書」に應ずると言っている記録者の視點は、「西京雜記」の跋文と重なるものを持つており、最後の「信ずべくも目に見るべからず」という詠嘆の調子は、「西京雜記」全體を流れる基調に合致している。

「西京雜記」の跋文（序文の位置に置くテキストもある）が最初から本文に附屬していたかどうかについては、議論がある。前に擧げた勞幹氏の論文は、隋志や「漢書」匡衡傳の顏師古の注が「西京雜記」の作者を不明としているのは、唐初までのテキストにはこの跋文がなかつたことを意味すると考えている。跋文があれば作者の名を擧げぬはずがないとされるのである。しかし例えば顏師古はこの跋文を讀んではいたが假託だと考えて擧げなかつたのだとすれば、唐以前のテキストに跋文がなかつたことにはならない。葛洪は單なる再編者はすぎず、劉歆の「漢書」は信じられぬとして作者の名を擧げなかつたのかも知

れない。十分に資料の残らぬ今となつては、こうした外的な證據による議論は結局は水かけ論に終始するであろう。

私は、跋文の内容がこれまで述べてきた「西京雜記」の説話傳承者に關係するための特徴的な構造とよく合致することから、本文から離れて別に跋が書かれたものとは考えない。跋文が或いは本文よりも時代が下ることがあるにしても、十分に本文の構造を理解した同じ流れの傳承者たちの中で書かれたものと考えたい。少し長くなるが、次に跋文を擧げる。

洪が家に世々劉子駿漢書一百卷あり。首尾題目なく、但だ甲乙丙丁を以つて其の卷數を紀す。先父 之を傳う。歆 漢書を撰せんと欲す。漢の事を編録し、未だ結構を得ずして亡く。故に書に宗本なく、止だ雜記するのみ。前後の次を失し、事類の辨なし。後に好事の者、意を以つて之を次第し、甲に始め癸に終り、十秩と爲す。秩ごとに十卷、合せて百卷たり。洪が家 具に其の書あり。試みに此の記する者を以つて班固が作る所を考校するに、殆どこれ全く劉が書を取り、小かの異同あるのみ。固の取らざる所を并するに、二萬許言に過ぎず。いま抄出して二卷となし、名づけて西京雜記と曰う。以つて漢書の闕を裨くるのみ。後に洪が家 火に遭い、書籍都な盡く。此の兩卷は洪が巾箱中に在り、常に以つて自ら隨う。故に猶お在るを得たり。劉歆の記す所、世人有ること希なり。縦い復たある者も、多く備足せず。其の首尾參錯し、前後倒亂をするを見るに、亦た何の書なるかを知らず。能く全録する罕し。年代稍や久しく、歆の撰する所遂に没し、并びに洪が家の此の書二卷も、出所を知らざらんことを恐れ、故に之に序して爾か云う。

洪が家 復た漢武帝禁中起居注一卷、漢武故事二卷あり。世人

之を有する者希なり。いま五卷を并せて一秩となす。庶くは淪没を免れんことを。

この文は、その調子から言っても「抱朴子」の著者葛洪のものとは思えず、「洪が家」と盛んに繰り返すことも、かえって假託であろうことを疑わせるものである。しかし述べている内容は「西京雜記」本文の構造とよく合致している。跋文が言う、劉歆が集めた記録が葛洪のもとに伝えられてこの書物を形成したという構造は、前漢時代に生きて人物が直接見聞したことを、蘇生したあとに語ってそれを記録したのだという「西京雜記」の本文から抽出される虚構の枠組みにそのまま對應する。劉歆が漢代の宮中にいたと稱する人たちの役目を、葛洪が蘇生したあとで物語りを語る人たちの役目を果しているのである。また跋文の最後に見える「漢武帝禁中起居注」は、少し虚構の枠組みの性格が異なり前漢時代に既に記録されていたという形式を取るものであるが、起居注と名づけられるところから見て、これもその當時の直接の見聞だということ看板にした、「西京雜記」本文の枠組みの虚構と共通性を持つ書物であろう。

「隋書」經籍志史部起居注類に、

起居注なるものは、人君の言行動止の事を録紀す。(中略)漢武帝に禁中起居注あり。後漢の明德馬后 明帝起居注を撰す。然らば則ち漢の時、起居は宮中に在り、女史の職たりしに似たり。然れども皆な零落し、復た知るべからず。

とある、明德馬皇后撰と稱する「明帝起居注」と共に、武帝の起居注も宮中の雑事を記録した小説的な作品であったにちがいない。零落して現在ではもう分らなくなってしまう史官の存在というのは、漢代の物語りを語る傳承者たちの枠組み的虚構の影響を受けた記述であ

「西京雜記」の傳承者たち

り、特に女史の職とされるのも、周禮などに見える官ではあるが、賈佩蘭のような女性の傳承者の存在になんらかの關係を持つものかも知れない。

更に「西京雜記」の本文の中にも、劉歆の「漢書」によってこの書物が作られたという虚構を確實にするためであろう、編纂者の言葉が挿入されている。

公孫弘の答は爛敗して存せず(卷五)

此より後、糜爛して存せず(卷五)

「この部分以下は殘缺している」と注記することによって、かえって劉歆の原本の存在を印象づけようとする巧妙な手段が取られているのである。更に揚雄の「方言」編輯について次のように言う。

揚子雲 事を好む。常に鉛を懷にし槩を提え、諸の計吏に従いて殊方絕域四方の語を訪ね、以つて輜軒の載する所を裨補すると爲す。亦た洪が意なり。(卷三)

張心激「僞書通考」雜史類は、最後の「亦洪意也」の句の洪は葛洪を指すのではないとしており不安は残るが、揚雄は各地の言葉を集めて「方言」を著したがそれは私(葛洪)がこの書物を編纂した意圖でもある、と讀むことができれば、「西京雜記」の本文が既に葛洪を再編者の位置に置いていたことの證據となる。

この論文の最初に講釋師的な語り手の語り口を表わすものであらうと推定した、もったいぶって自分だけにこの事が伝えられているのだと強調するやり方も、この跋文に見られる。他に完本の稀な劉歆の「漢書」が家に傳わり、この書物自體も火災をやつとのこと免れたと記しているのがそれである。

このような二重の枠組みによる虚構と屈折した傳承過程の強調と

は、物語り傳承者の獨自の技法であつたはずであるが、それを巧みに説話を文字に定着する際に應用してできたのがこの「西京雜記」である。「西京雜記」の眞の編纂者の探求は今後に待たねばならないが、この技法の應用のみごとさと、この書物が漢の雜事を集めた作品の中で他を抜いて獨自の風格を完成させていることは、恐らく同じく編纂者(たち)の文學的洗練に由來するものであらう。

前漢末の劉向や劉歆本人が「漢書」を著したかどうかを議論することは、我々自身が「西京雜記」の編者の虚構にたづらかされていることになるであらう。しかし跋文がこの書物は「漢書」に載らなかつた記事を集めたものだとしていることには、單なる虚構以上の意味があつたものと考えたい。「漢書」の存在を説話傳承者たちが氣にしていたことは、上引の「博物志」の例にも見えた。また「史記」に載らなかつたことだとして、「王子年拾遺記」は次のような記事を載せる。

むかし「秦の始皇帝が陵墓を築いたとき」工人を塚内に生埋にす。開けられし時に至りて、皆な死せず。工人を塚内において石を琢みて龍鳳仙人の像を爲り、及た碑文辭讀を作る。漢初、此の塚を發く。諸を史傳に驗するに、皆な列仙龍鳳の製なし。則ち生理の匠人の作る所なるを知りしなり。後人更ごも此の碑文を寫す。而して辭は怨酷の言多し。乃ち謂いて怨碑と爲す。「史記」略して録せず。

(漢魏叢書本、卷五)

このように「史記」や「漢書」の存在を氣にしている傳承者には、正史の權威をかりて自分たちの物語りの眞實性を強調しようとする姿勢がなかつたとは言えない。しかしそれ以上に、「史記」や「漢書」に載せられなかつた記事なのだと同調していることは、傳承者たちの間に正史のものとは別の歴史觀が生長しつつあつたことを表わし、正

史のものとは違ふのだという意識が、逆に正史の存在にこだわらせたのだと考えたい。

個人の生を離れて大局的な視點で歴史の流れを見渡そうとするのが正史の歴史意識の集約されてゆく方向であるとすれば、物語り傳承者たちの持つていた視點は、范友朋の召し使いが霍光の家や宮中の事件を語つたと「博物志」にあるように、ある個人の目(それは同時に物語り享受者たちの最大公約數的な目でもある)に執着して歴史の動きを見ていこうとするものであつた。個人に執着するそうした視點は、事件の推移を記述することそれ自體よりも、事件の経過を通じて浮び出る人々の生の哀歎を詠嘆することにその重點があつたものと考えられよう。

こうした視點が成熟してゆく先きは、一定の人間觀によつて再構成された歴史としての長篇小説である。歴史の流れの中で無數に生み出されるエピソード、そうしたエピソードに一定の人間觀による取捨選擇を加え、假構の時間の流れ(因果關係)の中でそれらを再構成することによつて長篇小説は成立する。私は、「西京雜記」「漢武故事」等々の作品の延長線上に、ついに稔らなかつた「漢書演義」とでも稱すべき長篇小説が存在したと想像する。言わばばらばらのエピソードの段階にある「西京雜記」などの作品の中に、長篇小説を生むべき基調が既に用意され、一定の取捨選擇が行なわれていると考えるからである。

「西京雜記」の傳承者の物語りの内容に對する態度の中には、時間の流れを振り返つて懐かしもうとする傾向が強いように見える。卷二に載せられたエピソード、太上皇(高祖の父親)は、漢王朝が開かれると深宮に住むことになつたが、平生親しんでいた「屠販の少年」た

ちを懐かしんで心樂しまなかつた。高祖は、そこで新豊の町を作つてふるなじみたちをそこに移住させた。

高帝 既に新豊を作り、並びに舊社を移す。衢巷、棟宇、物色、惟だ舊たり。士女老若、路首に相い構うれば、各々其の室を知る。犬羊雞鴨を通塗に放てば、亦た競いて其の家を識る。其れ匠人の胡寛が營みし所なり。移りし者、其の似たるを悦びて、之を徳とす。故に競いて賞贈を加え、月餘にして百金を累むを致す。

ここでは宮中にありながら無頼布衣の故人たちを懐かしんだ太上皇の行爲が強く肯定されている。犬羊雞鴨すら自分の家が分かつたという一節からも、故を懐かしむ氣持ちがこのエピソードの眼目であることが知られる。同じ卷の丞相になつた公孫弘が故人の高賀を粗末に扱つて手酷い仕返しを受けたという話し、また武帝が乳母を殺そうとしたとき、東方朔がそれを助けるために言った言葉、「汝 宜しく速かに去れ。帝 いま已に大なり。豈に汝が乳哺の恩を念わんや」を聞き、帝は愴然として乳母を舍したという話しも、同じく故人は懐かしむべきだという原理を基調としたエピソードである。宮中のことを綴る文學にありがちな、宮廷以外の所を見下そうとする態度は、ここには見られない。また匠人の胡寛が百金を累んだことを、素直にすばらしいことだとしている。卷二の王昭君の物語りにおいて、畫工たちが賄賂で巨萬の富を集めたことに對して非難がましい口つきをしていないことや、卷三の茂陵の富人の袁廣漢の豪華な生活の描寫も同様である。こうした所に、都市に生活する商工業者の意識の反映を見ることが不可能ではないであらう。

懐かしまれてゐる過去の時間は、光に溢れた輝かしいものである。既に擧げた卷六の昆明池の戈船樓船の條で、船に立てられた旗や蓋が

水ぎわに照り輝いていたのを覺えている、と述べられた所にそれが最もよく示されている。同様に光に敏感なことを表す條を擧げれば、次の例がその一端である。

樂遊苑に自から玫瑰樹を生ず。樹下に首宿多し。首宿 一名懷風。時人或は之を光風と謂う。風 其の間に在りて、常に蕭蕭然たり。日 其の花を照らせば、光采あり。(卷一)

趙飛燕が女弟、昭陽殿に居る。(中略)好風の日ごとに、幡旆の光影、一殿を照耀す。(卷一)

少し象徴的な言い方をすれば、こうした條において照り輝いているのは、思ひ出の中の時間なのである。あるいは、過去の時間と現在との間にある遙たりが、ひどく明るく輝いているのである。

こうした時間の輝きを捉え、巨萬の富を素直にすばらしいとする意識にとつては、前漢時代を振り返つてそこに物語りの場所を設定することが相應しかつた。それは、班固の「兩都賦」や張衡の「兩京賦」を讀むことによつても知られる。この二つの賦はいずれも西都長安と東都洛陽を比較し、前漢時代と後漢時代を秤にかけて、道德律のしつかり行なわれてゐる後漢の洛陽に軍配を上げるものである。しかしその文章は、道德的な規制によるかげりのない、盛大で自由な遊びの雰圍氣に満ちた西京を描くことに牙えを見せている。一般的な通念として人々の腦裏にこうしたイメージを結ぶ前漢時代の西京こそが、物語りをはぐくむ絶好の土壤であつたのである。

しかしこうした漢代の物語りに見える遊びの雰圍氣は、無制限な快樂主義に陥つてゆくものではない。その齒止めをなしているのは、「漢武故事」の中の武帝の「秋風辭」に典型的に見られるような、樂しみの後の悲しみの情、時間の経過に對する感傷である。それが宮中

の華麗さと對比されるとき、無常觀の如きものを抽出することができるであろう。また「西京雜記」のいくつかの條では死が扱われている。卷四には次のような一條がある。滕公(夏侯嬰)の馬車が東都門まで來ると、馬は嘶くばかりで進まず、足で土を掻いた。滕公がその場所を掘らせてみると、石槨が出現し、古代文字の銘文があった。以下を書き下しにする。

以つて叔孫通に問う。通曰く、科斗の書なり。今文を以つて之を寫すに曰く、佳城鬱鬱たり。三千年にして白日を見ん。吁嗟滕公此の室に居らんと。滕公曰く、嗟乎天なり。吾れ死せば、其れ即ち此に安んぜんと。死して遂に焉に葬る。

卷一には、呂后が趙王如意を暗殺させたときのこととして、次のような記事を載せる。

呂后 力士に命じて彼中に於いて之を縊殺せしむ。死するに及びて、呂后之を信ぜず。綠囊を以つて之を盛り、載するに小駟車を以つてして、入り見す。(下略)

綠の囊に入れ、小さな幌つきの車で呂后のもとに運びこまれる死體の描寫や、また同じ卷の、戚姫がつけていた鍊金の瓊環(ゆびわ)はキラ光つて指の骨まで透視したという記述などから、こうした物語りの傳承者たちの死への嗜好的とも言うべき關心を見ることができ。華美の背後に常に死を見ることによって、遊びへの指向が無制限な快樂追求の贊美に走ることを防いでいるのである。

過去を振り返った姿勢、巨萬の富への素直なあこがれ、遊びと死への關心、これらはいずれも、いわゆる士大夫的なものではない。漢の宮廷の雜事を述べる説話群の中にこのような特徴的な基調が存在することは、非士大夫的な性格を持つ文化擔當者の誕生を示し、彼らの新

しい人間觀が、長篇の小説「漢書演義」を組み立てる柱となるはずであったと、私は考える。

「西京雜記」に見える皇帝たちは、ひどく力弱いものとして描かれている。前に引用した賈佩蘭の條では、高祖は戚夫人に口説かれても太子變更のことはどうすることもできず、思い餘つて「大風歌」を歌う。「史記」が描く高祖の「大風歌」を歌う場面とはなんといい相違であろう。また卷一に、始元元年に黃鵠が太液池に降りたとき、昭帝が歌つた歌の最後には次のようにある。

自ら顧みる菲薄、爾が嘉祥に愧ず。

このようにきわめて弱いものとして描かれる皇帝たちには、「西遊記」の三藏法師と同様の性格を感じるができる。こうした弱い性格は、民衆たちの自分たちとは隔絶した高い位置にある人物に對する一つの性格規定に由來するものであろう。更に「西遊記」との對比を用いて言えば、「漢書演義」には、三藏法師に當る人物はいが、各々のエピソードを數珠つなぎにする糸となるべき強い個性を持った孫悟空がまだ出現していなかったのである。

最後に「西京雜記」の編者に葛洪が擬せられていることについて一言したい。前に擧げた跋文によれば、「漢武禁中起居注」と「漢武故事」と「西京雜記」とは、いずれも葛洪の手を経て傳承されたものとされる。「西京雜記」と「漢武故事」に密切な關係があるうことについては前に述べた。孫詒讓が言うように「漢武禁中起居注」が「漢武帝内傳」の原本であったかどうかは急に結論をつけることができぬにしても、「抱朴子」論仙篇が引用する「漢禁中起居注」と稱する書物と何等かの關係があるものであろう。「漢武帝内傳」の中で西王母が

武帝に賜わる「五嶽眞形圖」は、「抱朴子」が道教の經典の中で最も重要なものとするものである。こうした小説的な諸作品、更に現行の「神仙傳」、葛洪に假託される「枕中書」などは、相互の内容的な重なり合いから言っても、單に葛洪が道教思想の流れの中で有名な人であったために彼の名前が借りられたものとは考えられない。種々の點から葛洪とその思想に關係を持ち、葛洪グループとでも稱すべき纏まりを作っているのである。葛玄から葛洪に傳わる葛氏道と呼ばれる道教の一派は、葛洪以後どうなったのかよく分からないが、葛洪グループの諸作品と共に、「西京雜記」も葛氏道の後裔たちと關係を持ちつつ六朝期に江南で編纂されたと考えるのが、現在のところ最も可能性のある結論ではなからうか。

- 注(1) 人文研究Ⅲ・七、一九五二。
 (2) 文史哲學報十七、一九五八。
 (3) 舊唐書經籍志史錄起居注類、西京雜記一卷、葛洪撰(地理類同)
 新唐書藝文志起居注類、葛洪西京雜記二卷(地理類同) 日本國見在書目錄舊事家、西京雜(記)二卷、葛洪撰。余嘉錫、一九五八、北京。
 (4) 西陽雜俎卷十二 庾信作詩時、用西京雜記事、旋自追改曰、此吳均之語、恐不足用。
 (5) 歷史語言研究所集刊卅三本、一九六一。
 (6) 同右卅四本下、一九六二。
 (7) 文學遺產增刊七輯、一九五九。また中鉢雅量「吳越の春秋」大安一九六五・五、六。
 (8) 傅玄彈碁賦叙曰、漢成帝好蹴鞠、劉向以謂勞人體、竭人力、非至尊所宜御、乃因其體、作彈碁。
 (9) この條は、魯迅『古小說鈞沈』所收の輯本「漢武故事」には見えな

「西京雜記」の傳承者たち

い。類書等に引用のない條であるから議論に使用せぬのが安全かも知れない。しかしこの論文では、「漢武故事」に限らず「王子年拾遺記」等々についても、現行のテキストをそのままで使用した。唐宋の書物の引用文から原本の形をしっかりと定めて、その上で議論をするのが正道であるが、恐らくきわめて複雑なテキストの傳承を經ているであろうこれらの物語りの諸作品に對しては、現行のテキストを最大限に利用してその大まかな性格を規定し、それを利用しつつ細部の整理を行なう方法も、過渡的にはありえると考えるからである。

- (10) 余嘉錫「四庫提要辨證」も「漢武故事」の内容が時代的に班固と合わぬことを言う。
 (11) 宮中の百戲については、濱一衛「角觥百戲について」文學論輯七號、一九六〇、劉光義「秦漢時代の百技雜戲」大陸雜誌廿二・六、一九六一、参照。また水野清「漢の蚩尤伎について」京都大學人文科學研究所創立廿五周年記念論文集★、一九五四、は漢の畫像石との關係で百戲を論じておられる。
 (12) 禹歩の詳細は「抱朴子」登涉篇に見える。M. Granet, "Danses et Légendes de la Chine ancienne," pp. 549, Le pas de Yu, 1926, Paris 参照。
 (13) 王瑤「中古文學史論集」一九五六、上海、所收。
 (14) 福島吉彦「長門賦について」大安一九六四・十・六五・一。中國において長篇小説の發達が遅れることがよく取り上げられるが、賦の存在がそれを補うものであったかも知れぬことを指摘したい。長篇小説は古いものほど唱ら部分に重點があるという一般的な流れからすれば、通俗的な賦が長篇小説の一つの源流となったことも考えられよう。
 (15) 柳田國男集卷八「女性と民間傳承」、また塚崎進「物語の誕生」岩崎書店、一九五五。
 (16) 堀一郎「我が國民間信仰史の研究」(二)、八百比丘尼、一九五三。

- (17) 范明友の家の奴が漢朝の廢立について説いたことは、「洛陽伽藍記」卷三、菩提寺の條及び「三國志」卷三裴注所引の「世語」にも見える。
- (18) 顔師古が「今有西京雜記者、其書淺俗、出於里巷、多有妄說」と強い口調で述べているのは、かえって彼が作者についてなんらかの説を聞いており、それを否定しようとしたためではなからうか。
- (19) 明帝起居注は「文選」顔延之藉白馬賦の李善注に引用される。漢武禁中起居注については注(2)を参照。起居注についての同様の記事は「史通」外篇史官建置の條にも見える。
- (20) 小さなエピソード群を一人の主人公が貫いて長篇の物語りが形成される以外に、物語りの中に物語りが入る、いわゆる枠入り物語り (frame-story) の形式で長篇が形成される道もある。この形式は「千一夜物語」から「デカメロン」に受け継がれ、西方世界においては逸話と小説とをつなぐ橋の役目を果している (ウエレック・ウォーレン『文學の理論』、太田三郎譯、筑摩書房、一九六七)。この枠入り物語りの技法が東方に全然なかったのではないことは、日本の物語りの祖である「竹取物語」において、かぐや姫に求婚する貴公子たちの冒険の部分に見える説話の接合の仕方がこれに近いことから知られる。「西京雜記」の、私が二重の虚構と述べた構造も、或いはこの技法の應用であるのかも知れない。原田淑人「漢と安息の文化關係について」(『東亞古文化論考』一九六二、所收) が言われるように漢代の宮廷の百戯に西方からの影響があるとすれば、この物語りの技法が西方から輸入されたこともありえよう。

(21) 孫詒讓「札遼」卷十一西京雜記。